

論理的に就て

故野崎廣義

論理的とは、認識の *conditio sine qua non* を指すものである。認識が認識たるには、即ち普遍的必然的たるには、是非この條件を満足するものでなければならぬ。故に認識論に於て認識の限界と構成の如何なるものであるかが問題とされる限り、當然論理的の構成と限界がその中心問題の一つとならなければならぬ。之に就て考へるには、論理的の根本要求から見ると構成の方を主として考へるのが順當であると思はれる。其根本要求は *Axiom der Konsequenz* であるが、吾々の認識は總て飽く迄も *self-consistent* でなければならぬ。換言すれば論理的でなければならぬと言ふことである。勿論論理的の限界はこの根本要求がどこ迄透徹せられるかに依つて決定されるものであるだらうが、それに先立つて論理的の構成自身が決定されてゐない限りは、その根本要求が何所迄満足され得るかといふことは知り難い。而して論理的の構成そのものは、徹底の公理を満足してゐるものでなければならぬ。故に

その構成は大體之に依つて推理し得る理である。

或る認識が眞であるとは、それが self-consistent であることである。つまり論理的であることだ。併し之に對して、眞なる認識は常に論理的であるが、論理的なる認識は必ずしも全然眞ではないと考へらるゝ場合もある。それは彼の *materiale Wahrheit* に對して、*formale Wahrheit* を立する考である。例へば *eine Tochter des Cajus* といふ時、*Cajus* が實際 *Tochter* を有しない場合でも、吾々はかゝることを考へても論理上矛盾しないものである。若しこの考が正當であるとすれば、論理的なる概念と眞なる概念と全然合致するものでないことになる。論理的は形式的眞を現はすけれど、實質的眞を現はさないことになる。併し形式的眞と論理的は全然合致し得るものであらうか。形式的眞は、今云ふ所に依ると、一群の諸命題に矛盾しない範圍に於ては *formal wahr* であるが、他の一群の命題に關しては矛盾するものであるから、*formal falsch* である。して見ると、形式的眞と論理的とが合致するとすれば、矛盾も論理的であり得ることになる。併し之は *Axiom der Konsequenz* を満足せしめない。故に形式的眞は論理的ではない、また眞でもない。Bolzano はかゝる眞理概念を *Verhältnisbegriff* に過ぎないものとしてゐる。けだし完全に self-consistent たり得ない一切の概念は、一の關係概念であ

る。

斯様に考へると認識に於て論理的は眞なる概念と全然合致しなければならぬ。あらゆる認識は總て判断として存する。若し判断にならない認識があるといはれるならばそれは言葉に囚はれた考で、言葉の上では判断の形式を成してゐないでもその背面にひそむ意味を求めると、必ずそれが一つの判断である。今假に判断にならない認識があるといふとを許すとしても、そのこと自身が、その認識が判断であることを *reassert* するものである。全體判断と没交渉のものならばこの断定も下せないわけである。従つて認識即判断である。然らば眞なる認識眞なる判断とはどんなものであらうか。

眞なる判断は、自身の内に於てのみならず、他のいかなる判断に對しても、徹底の公理を満足せしめてゐるものでなければならぬ、*self-consistent* であらねばならぬ。*self-consistence* は、換言せば統一である、併し單なる統一は統一ではない、統一自身多様なものを豫想してゐる。故に眞なる判断は多様なものゝ統一である。多様なものは、その構成要素を簡單に云へば、*das Eine* と *das Andere* とより成つてゐる。一を *The-
sis* とすれば、他は *Heterothesis* である、共に對立的規定の上に成立つてゐるから、*Besond-*

960
ere」と云ふて宜し。之を綜合したものが統一であるから、之を *das Besondere* に對し

て *das Allgemeine* といふことが出来る。眞と論理的とは合致してゐるから、論理的の構成は、多様なるものゝ統一、特殊的に於ける一般的である。之は *selfconsistence* の規定から導かれたものであるから、徹底の公理を満足せしめてゐることは云ふまでもない。

併し、この構成は輪廓だけの説明であつて、その統一一般は何であるか、その特殊、多様は何であるかと、更に積極的に穿鑿すると、立場が種々ちがつて来る。立場といふことは考の出發點に依つて決せられる。論理的の構成に就て觀ると、出發點が二つあるわけである。即ち統一に即するか、多様に即するかである。何れにしても一方の要素を無視するわけには行かないが、統一と雖も多様に對立する以上は、一つの特殊なるものである故に、多様の内の一つである。故に多様そのものゝ内に、多様の統一の可能を證明しなければならぬとするのが一の立場であつて、之に對して、統一自身から多様を導き出すべきであるとするのが、他の反對なる立場である。前者は發現基礎たる直觀をその出發點とし、後者は純粹思惟を以つて統一の發現基礎としてゐる。兩立脚地は共に、*self-consistent* に進めば結極一に歸すべきものであらうが、途

中で種々の *Idola* に引懸るが爲めに、非常の背敵を來すのである。吾々は今論理的の基礎を直觀の方から求めやうとしてゐるのであるが、何故に此の方を執るかを明瞭にする爲めに、純粹思惟を出發點とするものに就て少し考へて見たい。

此の考では純粹思惟が多様を可能ならしめる統一である。従つて純粹思惟は絶對でなければならぬ。従つて多様なものは被制的のもので、或條件即ち純粹思惟の下に與へられたるもの、*das Gegebene* でなければならぬ。従つて直觀は純粹思惟に從屬してゐるものである。従つて思惟自身は直觀の認識理由であると同時に存在理由でなければならぬ。而して實在論を許さざる限りは、認識即ち存在であるから、之を單に存在理由といふのもいゝ理である。故に純粹思惟は最根源的のものである。根源の概念が純粹思惟の根本規定を現はすものである。故に *Ursprung* の概念は直觀のみならず、若し他に存在がありとすれば、一切の「存在」に先行するものでなければならぬ。若し此の概念が純粹思惟の根本規定であるとすれば、純粹思惟は *das Vorseiende* のものであつて、即ち一種の *Nichts* である。併乍ら *Nichts* から如何にして「存在」が出て來るか、*Axiom der Konsequenz* の上から見ると頗る六かしいことである。即ち「存在」が思惟自身の内在的規定でなければならぬ。併し純粹思惟が「存

在の存在理由たることは、*positio principii*である。之を避けるにはそれが *Nichts* になければならぬ。即ち純粹思惟に就てそれが有であること、無であるといふことが同時に云はれるから、一つの *Antinomie* が立せられる。

然らばこの *Antinomie* が如何にして解除されることが出来るであらうか。若し兩反對の立言が共に必然的のものであるとするならば、その對立が如何にかして調和されなければならぬ。然らずば思惟自身が論理的を破壊し終るものになる。

此の二つの立言は各異つた長所と短所を有する。思惟に「存在」の規定を許すとする、徹底の公理は満足せしめられるけれど *positio principii* である。勿論避くべからざる循環論は之を犯すに如かないかも知れぬが、それを *Nichts* とすることが出来る。すれば、尙ほ *vermeidlicher Zirkel* である。併し純粹思惟を無とする事は徹底の公理を破ることになる。従つて兩者の長所を兼ね合せるといふことは、兩者の短所を兼ね合せるとになる。つまり純惟思惟が有であると同時に無であることを大膽に許すのも一つの調和法である。勿論同時といふ所に此の考が *statical* でなければならぬとを豫想される。之が *Rickert* の考である。*Rickert* は斯る純粹思惟を純粹思惟といはず意味と名付けてゐる。彼は意味を *Was nicht ist und doch zum Etwas u. nicht zum Nichts*

gehört としてゐる。何となれば意味は一切の存在に先行する、つまり意味があつて一切の存在があるのである。而かも意味は存在そのものではない、Nichts に類するものである。併し Nichts でもない。何となれば意味が全く Nichts であるとすれば sinnlos であるからである。この意味は eine schlechthin unzerlegbare Einheit 即ち純粹統一である。従つて此の立場から論理的の Einheit des Mannigfaltigen の統一はこの意味に相當することになる。而して意味は一切の存在に先行するものであるから transscendent のものである。之に反して多様なるものは存在するものである、従つて直観は存在するものである。Denkakt も内在するものであるから亦廣義の直観の内に入る。此考では Antinomie の解除されてゐないことは勿論であるが、之をそのまゝ容れることも一つの見方としたのであるから之を深く追窮しないとしても、意味が一切の存在を超越してゐては、それが如何にして内在し得るか、問題である。若し内在しないとすれば、それが存在の存在理由たることは出来ない。若し如何にかして内在してゐるもの例へば Gefühl der Evidenz として内在してゐることを豫見出来るとすれば、何も別に超越的の意味をいふ必要を認めない。即ち存在と意味を合致すると考へ、多様の内に統一を、直観の内に純粹思惟を認めればいゝではないか。尤

も存在と意味とが合致してゐるのは、*Erleben* に於てはあつて、*Erkennen* に於ては、兩者が *schelden* されるものだと思へられるかも知れないが、かゝる *Erkennen* を論ずる *Erkenntnistheorie* は、永久に意味も存在も立證し得ない片輪のものであるから、別の *Erkenntnistheorie* を立して、存在と純粹思惟とを圓滿に解釋する必要がある。兎に角此の立場から論理的なるものは、多様に即しては内在し、統一に即しては超在する、一種異様な怪物となつて了つた。

それにかゝる悩みを脱するには、純粹思惟を内在的の者と考へなければならぬ。併し純粹思惟を *betonen* する以上は、直觀の内にその基礎を求めてはいかぬ、従つて自己の内に直觀、多様なものを内在せしめなければならぬ。併し *Bierckert* の様に、無にして有の規定を純粹思惟に同時存在せしめるならば、復之を超越的のものと考へなければならぬから、今度は之を *dynamisch* に考へて、純粹思惟を *creative* のものとしたらばどうであるか。之は *Colson Kantorf* の試である。之に依ると、純粹思惟に依つて、存在、多様が創造されることになる。此考は頗る正當な考であつて、之に依つて彼の *Autonomie* が調和される。何となれば、徹底の公理自身は *creative* の規定をあらはすもので、この公理自身も之を *statical* のものとすれば、*circle* に陥るべきものである。 iii

vermeidlicher Zirkelとは、徹底の公理の要求を指すものである。又多様の存在は純粹思惟に由來するを以て、多様の存在が寧ろ思惟の絶對性を確立する、従つて多様なるもの、統一なる彼の論理的は、純粹思惟に依つて可能である。直觀も亦純粹思惟に依立する筈であるから、論理的の限界は無限となり、Panlogismus が立せられる筈である。

然らば Alles ist Denken といふことが主張されなければならない。併し此の考では、純粹思惟が多様、殊に彼の sentient なるものがどう創造されるのであるか。その考に依ると、純粹思惟がそれを Aufgabe として finden するとされるのである。併しこのことは、純粹思惟活動の限界を示すものではなからうか。従つて直觀に於て、論理的がその限界に遭遇したものでなからうか。勿論純粹思惟が發展するには、絶えず解決の對象たる問題を自身に見出して、之を解決することに依るものであらうが、併しその問題たるや、解決の對象たる問題であるが、今の場合の問題は、之に反して、問題として殘されるべき問題である。純粹思惟は發展して das Gegebene に至るといふも、實は到達した所は das Gegebene に非ずして die Gegebenheit である。 das Mannigfaltige ではなくて die Mannigfaltigkeit である。故にこゝに das Logische の構成は Einheit des

Mannigfaltigen でなく Einheit der Mannigfaltigkeit である。故に純粹思惟が直觀を創造するといふも實は Gegebenheit の範疇、即ち直觀形式、純粹直觀といはるゝ absolute Zeit u. Raum 即ち、並列的規定を創造するのである。この Raum u. Zeit に入らぬ前の直觀内容そのものは永久に X として残されるのである。故に多様なものを抜きにした多様性、所興料を抜きにした所興性は、實は兩者の必然的關係が説き明されない内は、空虚な規定即ち無規定の規定である故に、彼の純粹思惟の創造といふことは、七彩なくして大空に虹を畫かんとするやうなものである。終に純粹思惟自身は、Rickert の立場と同斷の transcendent のものとして、Denkakt と區別されなければならぬことになるまいか。何となれば思惟自身も亦 das Gegebene と見做すことも出來、而して das Gegebene としての思惟と純粹思惟とは、彼の直觀形式に依つて障壁がつくられてあるからである。

Kant は斯の困難を避けんが爲めに、直觀と純粹思惟とを峻別してゐるに係はらず或は直觀の内に論理的の Affinität がありとなし、或は純粹思惟を innere Sinnlichkeit の内に流動してゐるものだと考へたのである。之は Kant の豊富な多方面性を證明してゐるものであらうが、併し Kant が直觀の内に論理的の Affinität があるとしたのは、

思惟が直観を *bearbeiten* した結果から推論したことで従つて *wahrscheinlich* のことである。従つて論理的の *Affinität* の根拠を直観の内に求むるには、直観内容自身の内に求めなければならぬ。何となれば結果から起因を求むるは、遂に結論が蓋然的たるを免がれないからである。又 Kant が純粹思惟を内感の内に流動せしめたけれど、Kant の内感の形式たる時間なるものは彼の絶對時間で更に詳しくいふと、並列的規定の上に立つてあるものである。約言すれば空間的時間である。また Kant の思惟なるものは、*dynamical* に解し得るけれども、大體 *statical* であつた *formal* のもので、彼自身の直観形式とよく似てゐる。此點からいふと、純粹思惟を直観形式の内に直観内容と共に流動せしめずに、直ちに純粹思惟即ち直観形式とすることが、彼の立場を一方に徹底せしめる所以である。之は併し、矛盾が少くなつたといふ丈けのことで、直観内容なるものが何故並列的なる直観形式に必然的に容れられなければならぬかは、説かれずに残る。従つてまた純粹思惟との必然的關係も明瞭でない。

Notion などの云ふ所に依ると、その純粹思惟は Kant の直観形式と悟性とを結合したものであるといふてゐるが、之に依つて、益々それが並列的規定の上にあるもので、直観内容が何故に並列的規定の内に見出されなければならぬかを説明する義務

がある。Windelbandが reflexive Kategorie が直觀形式に依つて schematisieren されることに依つて konstitutive Kategorie となるといつてゐるが、Kantが konstitutive Kategorie を更に再び schematisieren してゐる。即ち屋上屋を架してゐるのを少し改良した丈けで、やはり同様の非難を免れない。

純粹思惟を以て並列的規定の上に立つといふことは *Idola* であるや否やは今吾々の論ずべき場合ではない。併し並列的規定と直觀、更に明瞭に云へば、直觀内容、多樣なるものが必然的關係に於て説明されてゐない、つまり創造されてゐないといふことが既に明となつた所である。併し之丈けでは純粹思惟に限界がある、従つて之を *betonen* する立場の論理的には限界があるといふことは、積極的に確定されたと云はれない。之が確定されるには、並列的規定を有する思惟から、直觀を本質的に導くことが出來ないといふことが證明されなければならない。之が即ち吾々の立場を明かにしなければならぬ所以である。吾々は直觀を以て、かの並列的規定を有する純粹思惟より、より抱括的であつて、より廣般なものと考へるのである。吾々は思惟するが故に直觀するのでなく、直觀するが故に思惟もし得ると考へるのである。若し斯様に觀得たとするならば、論理的の基礎も直觀の内に求められ得る筈である。

従つて又論理的は、'Einheit des Mannigfaltigen' なるが故に、'Einheit der Mannigfaltigkeit' であると考へられるわけである。

併し直観は被制約的のもので、思惟からはなしては *Loitze* の所謂 *zusammengeratene Vorstellungen* であつて、*stuhbor chaos* のものではないか。之を出發點とするのは破れた羅針盤で航海するやうなものではないか。併し直観を以つて斯様に稱へるのは、純粹思惟の並列的規定を以つては之を全體とらへることが出来ないといふ *self-realisation* の聲ではあるまいか。直観そのものが並列的規定でない以上はその立場から之を並列的に *bearbeiten* しなければならぬ。そこで *bearbeiten* しない所のもの又は *bearbeiten* し得ない所のものを精製品に對する粗製品或は原料といふ風に考へる所からかく云はれるのであるまいか。故に斯様な立場から *Alles ist Denken* とは云はれずして、*Alles ist Methode* と主張されるのは當然である。この場合に純粹思惟即ち方法とされることは勿論であるが之を以て直ちに一切即ち純粹思惟であるとは云はれない。實はそれは方法として並列的の *Bearbeitung* が可能なる範圍に於て一切であるのである。この方法としての思惟が若し從來説く通り直観を創造することが出来ないものとするればこの並列的規定が直観にその必然的基礎を有しなけれ

ばならない。若し然らずば純粹思惟が直觀を *bearbeiten* して得たる結果は artificialなものとなつてしまふ。Lipps は認識の空間的觀方を *eine Betrachtungsweise* として、それには限界があるとして Lipps 一流の *Erlebnistheorie* を説いてゐるが、その所謂 *Erlebnis* からなぜかゝる空間的見方が必然的に存しなければならぬかを説いてゐないやうである。併し之を明瞭にしない限りは、やゝもすれば *conventionalism* に隙を窺はれる恐れがある。のみならず、之では徹底の公理が満足されない。故に並列的規定空間的認識の基礎を直觀の性質から導くことも忘るべからざることである。兎に角先づ直觀の性質を明にして論理的の基礎を求めなければならぬ。

直觀は先に *das Gegebene* と云はれたが、之は思惟に依つて見出されたといふ假定が入つてゐる。思惟が獨自に無制約的のものであるといふことを許しての後のことである。かくして直觀は、永久に問題としての問題として残されることになつた。或はこの主張に對して、問題とされたのは既に解決された所以であるといはれるかも知れないが、之はむしろ吾々の方で云ひたいことで、吾々は更に進んで、直觀は問題とされずしてそれ自身解決されてると云ひたい。之れを嚴密に云ふと解決といふもまだ手ぬるい。直觀は直接なものであるのだ。直接であるといふことが直觀の

第一規定である。併し直接といふと直ぐ自我に直接であると考へられるが、自我といふ時は、はや第二義に墮在してゐるからいけなない。つまりこゝに直接といふことは *an und für sich* に直接であることである。従つてこの直接といふことは間接に對立してゐるものではない。我なる個物的中心を脱却してゐるから斯様な對立を絶してゐる。かゝる對立に依る直接間接は、こゝに云ふ直接なるものゝ内面に於ける規定である。故に直觀には限界といふものがない、換言すれば、内外の障壁がない。内外なるものは一の對立であつて、之もやはり直觀の内面に於ける規定である。だから直接なる直觀には内面があるばかりである。恰も *stained glass* の美觀を樂まむには殿堂の内面から眺めなければならぬ様に、この直接なる直觀の真相も亦この内面にある。勿論、此の内面と云ふことは空間的規定ではない。何となれば空間的の規定は、内外排除の對立的關係にあるから直觀の根本規定ではないのである。斯様に直觀は純粹に内面的であるから純粹に中心的でなければならぬ。そこに *periphery* と云ふものがない。といふのは總て直觀のありのまゝの意味を具有するといふことである。即ち意味と存在とが唯一不二の状態であるといふことである。従つてそれを離れて對象なるものなく、又之を統一する統覺とか意識一般とかいふも

のがない。之は共に直観よりすれば *Denxer machina* に類する無用のものである、即ち直観は意味存在の未分なる *Erleben* に相當するものである。

純粹に中心的であるといふことは、*Peripherie* がないといふことであるから、直観はそれ自身以外に向ふべき目的もなく、従つてまたそれに向つて動くといふ活動もな
いわけである。然らば直観は全く靜的のものであらうか、純無目的のものであらう
か。若し斯様に直観の向ふべき目的が直観を超越してゐるものとすれば、それは直
観の純粹内面性、中心性と矛盾するから之を、否拒しなければならぬ。して觀ると
無目的靜的のものといはれるかも知れないけれど、併し直観自身が純粹に中心的で
あるとすれば常にそれ自身に向つてゐなければならぬ、即ちそれ自身の内在的な
目的に向つてゐなければならぬ。尤も目的といふ言葉が超在を聯想せしめる
恐れがあるとすれば、それ自身の意味に向つて動かなければならぬといふて宜しい。
若しそうでないとすれば直観が純粹に中心的であるといふことが、破れるからであ
る。従つて直観に於ては、それ自身の活動と自身の活動と相一致する。故に直観が
あるがまゝの意味を有するといふことは、直観が活動するがまゝの意味を有するこ
とで、又意味のまゝに活動するものであるとも云へる。斯様に直観が意味と活動と

の相即のものであるとすれば、意味といふものが indeterminate のものとなり、従つて直観に於ては規範の確立と云ふことがなく、真理の絶対性が否拒されるやうに考へられる。併し、絶対的の真理がないといふことは、それ自身真理の絶対性を reussert するものであるから、従つて直観をはなれた純粹思惟が立せられなければならぬ。而かもこのものは彼の思惟活動から全く獨立すべきである。若し兩者が合致するとすれば意味が indeterminate であるといふことは、直観に於けると同様になつてしまふ、従つて絶対の真理が可能であるといふには、意味と存在とが唯一不二なる Erleben の形から、意味が現存的のものとして分際しなければならぬやうである。故に transzendenten Sinn を立するか、或は一切の存在を Aufgabe として、やがては絶対の意味たる純粹思惟に依つて突破さるべきものとして許さざるを得ないやうである。従つて絶対真理を思惟するといふ Denktakt が存すると否とに關はず絶対真理が可能であるといふことになる。併乍ら假りに之を許すとしても、Denktakt が絶対真理を自身の中に盛り得るものだといふことも疑ふことが出來ない。然らばこの Denktakt の有無に係はらず、Denktakt が真理を盛り得るものだといふ奇妙なことが云はれなければならぬことになる。之は Denktakt と意味を分離する所から起るのである。即ち

意味と存在といふことは相即しなければならぬといふことは思惟に就ても云はれる。即ち思惟も一つの *Erleben* でなければならぬ。思惟が *Erleben* であるといふことは、そのものもまた純粹に内面的のものであるから、それが本質的には直觀の外にあるものではないことが推測される。その關係に就て更に立入つて考へることは暫らく後にゆづるとして、兎に角斯様に存在と意味、云ひかへれば活動と意味とが相即であるとすれば、かの絶對眞理なるものが結極維持することが出來ないものであらうか。吾々は寧ろ直觀に於ける此の純中心的規定に依つて絶對眞理が維持されるものと考へるのである。それは直觀自身の活動する方向に就て考へると明亮になると思ふ。直觀活動の方向は勿論直觀の純粹中心的規定に依つて決せられる。直觀が純粹に中心的である、即ち意味と活動とが相即するといふことから、直觀活動の痕跡は、若しありとすれば線の如くその各部分が *nebeneinander* に殘されるものではない。常にそれ自身の内におさまられる。従つて Kant が云ふた様な *absolute Zeit* といふものはあり得ない。直觀は限なく現在である。併しこのことは直觀が *dynamical* である、活動的であるといふことと矛盾するものではない。何となれば限なき現在であるといふことは、自己を超越して *statical* な痕跡を殘さぬといふこと

であるから却て純粹に直觀が流動的なることを表はすものである。つまり直觀活動の規定は直觀活動の内にあり、直觀活動そのものであると云はれる理である。

従つてこの活動は即ち形式が動かざることによつて内容が動くといふやうな形式と内容との相對的關係によつて成立するものではない。内容と云へば全體が内容であり、形式といへば全體が形式であり、直觀そのものにおいては内容形式が自由に *nuschlagen* することが出来るのである。それで直觀活動は全く自己決定的のものである。併しこの純粹流動の内に一つの動かないことがある。それは直觀が自己決定的に流動するものであるといふことである。この點から觀ると直觀は絕對に動かないものである。この一見矛盾するやうな立言を盾にして、活動の原理に對して靜的なる絕對原理を立てやうとするものがある。(Simmel) 併し、直觀が純粹活動であるといふこと、それが純粹活動であるといふことが動かないといふことは決して矛盾するものではない。それが矛盾するといふのは、立言を直觀の外に立て、之を寫す鏡面のやうに心得るからである。併し、それは既に直觀の純内面性、自己決定性を破つて空間的の規定を挿入してゐるものである。直觀にあつては立言即ち直觀である。直觀が流動的であるといふことが動かないのは、その立言が直觀自身を

體現してゐるからである。直観と唯一不二であるからである。斯様に直観が純粹活動であるといふこと、純粹活動であるといふことが不動であるといふことが矛盾しないといふことがわかれば、絶對眞理なるものは直観の純粹活動といふことに破られるものでないといふことが考へられ得ると、略豫想がつくが更により進んで直観活動の性質を考へて之を確立したいものである。

直観は純粹活動である以上は、一つの勢を有する音楽に於ける音の流れのやうなものである。併し、樂譜が音楽でないやうに、直観は限なき現在であるから先行のものも自己におさめて後行のものを自己の内に含むのである。而して先行後行といふも現在の一圈内に總括されてる所から見ると、相互が *ausser-einander* の關係にあるに非ずして、相互貫通の關係に於てあらねばならぬ。従つて眞なる時は *nacheinander* の關係にあるものではなく、*durch einander hindurch* の關係にある限なき現在である。之は直観の純粹中心的であり、純粹内面的である限り是非ともかくもなければならぬ。何となれば若し直観活動並びに直観内面の相互關係が相互貫通してゐないとすると、それは *ausser-einander, nebeneinander* の關係に墮在して、直観の純粹内面性中心性が破れなければならぬからである。併し、直観の相互貫通性は決して渾沌ではない。

若し渾沌ならば相互貫通性も、従て又内面性も中心性もあつた者でないからである。直観が相互貫通性を有するには、其内に只一つの視點が維持されなければならぬ。若し視點の維持がないとすれば、相互貫通性は渾沌となつてしまふからである。又、併し、二つ以上の視點があつては直観が二元に分裂するから、従て其内面性が破れる故、其視點は唯一つでなければならぬ。斯様に唯一つの視點の下に、直観が相互貫通の關係を有するといふ事は、直観が持續的であるといふ事である (Kinkel)。

所で更に唯一なる視點はそれ自身如何なるものであらうか。この唯一なる視點は吾々の立場からいふと直観と別なものであつてはいけない。それから獨立のものとしては勿論のこと、その一部分に根據があるものだといふことになつても、部分に即することから直観の全體性なる相互貫通性を部分的のものとしてしまふ。故にその純粹内面性を破るに至る。それで唯一なる視點は直観全體を掩ふものでなければならぬ。即ち直観そのものでなければならぬ。故に視點それ自身が純活動的のものである。何となればそれは純活動的なる直観そのものであるからである。而して直観が活動的であることは、先述の如くそれ自身の意味に向ふことであるが、それ自身の意味に向ふとは、更に詳しくいふと、直観が直観自身を寫すとい

ふことである。直觀が純粹に内面的のものであるからその意味に向ふといふこともそれ自身を離れて他に向く筈がない。即ちそれ自身を寫すことに外ならない。之れが即ち直觀の反省である、即ち直觀の反省とは直觀活動の別の名に過ぎない。それで直觀の反省は直觀に對立して非直觀を立するのではなく、直觀自身の内に直觀自身を立するのである。こゝに直觀自身の内に直觀自身を寫すことに依つて直觀活動が無限の發展を爲す。そこで直觀自身の内に直觀自身を寫すことはやはりもとの一なる直觀ではないかといふ疑が起るかも知れないが、吾々は直觀は一なるが故に無限が出て來ると考へるのである。今之を明瞭にするが爲めに、Billiamの例に依つて考へて見る。二面の同面積であつて厚さのない平面鏡を想像する。一定の距離を置いて相對せしめる。然る時は相互に、その内にその内にと無限の影像がより小さくより小さくうつされる。而して之を數學的の言葉で云へば、相互の影が *Arith.* に向つて收斂する。而して兩者の距離を近づければ近づける程、その影像がより大きくなり原のものに近づいてくる。遂に兩者が合致した時、即ち一となつた時尙之を或光線が通過しうるとすれば、兩者一ではある。がそこに又無限の影像がなければならぬ。勿論距離が0であるから、その影像が零に收斂する筈がない。直觀

の反省といふものは之に類するものである。直観をはなれて對境なく、又之を寫すものもないから直観の反省、直観活動は一にして無限であるのである。而して一なるが故にその無限は極小に收斂せず、如實に發展するのである。而してこの一なる直観が無限に發展し得るものであるといふことが、眞理なる記號であらばされるのである。例へば赤が赤であるといふときは、赤なる斷片的直観が自身の内自身を寫したのであるが無限に赤々々々となる、之を一般的の記號であらばすと眞理が眞理であるといふことになる。ここに反對の起るのは、赤が赤であるといふことが眞理であるといふことは無限に眞理であるといふことが云はれるけれども、吾々の主張に依ると、赤が赤であるといふことが赤であるといふ滑稽なことにならなければならぬといはれるかも知れないことである。吾々はこの滑稽に見える所のものが却つて眞理の眞面目を表はしてゐるものだと考へる。赤が赤であるといふことが眞であるには、眞にその主張が赤そのものに成り切つてしまはなければならぬのである。そうでなくば、赤そのものと赤が赤であるとの命題とに^等があることになる。即ち兩面の鏡が相照すに兩者尙ほ幾分の距離があると同様である。彼我相對する所に認識の發展があるとしても、空虚な眞理といふものに收斂してしまはな

ければならない。併し斯様に空虚な眞理に即すると遂に *Wahrheit an sich* といふものが立せられて *Denktakt* と分離されなければならぬ。併し之は不可能のことて、意味と *Denktakt* とは相即のものでなければならぬことは既に之を述べたが、こゝに至つて吾々は思惟なるものも直觀の反省に外ならないことが斷ずることが出来るやうになつた。即ち思惟は意味と存在との相即のもので一つの *Erleben* である。やはり直觀の圈内に屬するものである。而して直觀がその本質上必然的に反省しなければならぬ、即ち思惟なる *Erleben* が現はれなければならぬ。従て直觀には必ず判斷が無ければならない。即ち認識が無ければならない。之を又逆にも云へる。認識が判斷であり、判斷は直觀であるからである。

斯様に判斷の必然性の基礎は直觀の反省即ち直觀活動に依るものであるが、その普遍性も亦直觀自身に依て確立されるのである。一の判斷が普遍性を有するといふことは單に一般的に即してゐては空虚なる普遍性を有するに過ぎない。彼の超越的意味や純粹思惟といふやうなものになつてしまふ。それで判斷が眞に普遍性を有するには、是非とも一般なるものが特殊なるものを貫通しなければならぬ。即ち判斷が普遍性を有するには特殊性を兼ね有せなければならぬ。兼ね有すると

しても dual のまゝで兼ね有するならば一般なるもの特殊なるものが相貫通してゐるのではない。故に兩者は唯一不二でなければならぬ。従つて一般なるものが特殊なるものを貫通してゐるといふのは、特殊なるもの相互貫通してゐることである。之に依つて見ると、判断の普遍性は直觀の相互貫通性に依つて可能なるものであつて、普遍といふも實は一般ならず、特殊ならず、従つて同時に特殊であり一般なる所に、換言すれば一ならず多ならず、従つて同時に多くして一なる所に存在するのである。このものが、即ち、眞の多様な者の統一であつて、論理的構成の基礎である。故に論理的構成は直觀の相互貫通性に依つて可能なるのである。而してその Axiom der Konsequenz は直觀活動に依つて満足される。何となれば判断の必然性は無限の直觀活動に依つて成立するからである。

所で一にして多一般にして特殊なるものは如何なる表現に依つて示され得るかと云ふと das Ganze である。das Ganze 以外に之に好適する表現はないやうである。而して das Ganze と云ふことは直觀の純粹内面性である。直觀が das Ganze ならば、その純粹内面性は當然破らるべきである。何となれば直觀に對して das Andere が立せられ、従つて直觀に外面が出来る。併し之は先に考へて來た所に依つて到底不

可能のことである。故に直觀が *des Ganze* でなければならぬ。(而して *das Ganze* は一般的なるのみならず、特殊であるから *das Individuellen* である。) 故に論理的は直觀に依つて存立するもの、更に嚴密に云へば、直觀そのものを表現してゐるものだとすれば、一般的に制限せらるゝことなくして、特殊的に及び、特殊的に束縛さるゝことなくして、一般的に及び、とりもなほさずその限界は無限である。即ち一切が論理的であり、一切が判断であると云へる。此の見地から Hegel の *Alle Dinge sind ein Urteil* といふ主張は吾々にとつて意味のある言葉のやうに思はれる。吾々に於ては直觀が一切であり、一切が論理的であり、而して直觀以外に認識といふものがない。故に認識が即ち論理的でなければならぬ。従つて認識の *Conditio sine qua non* は論理的であるといふことが出来る。

併し乍ら吾々の云ふ判断は *Concrete* のものであつて、従つて論理的も *die Einheit des Mannigfaltigen* である。*Einheit der Mannigfaltigkeit* ではないのである。この *formal* な論理的は如何にして可能であるか、又何故此立場に執して直觀を觀るとそれが *stubborn* *Chaos* 問題そのものとして考へられなければならないか。之は今迄考へて來たことに依つて説明することが出来るやうに思はれる。*Einheit der Mannigfaltigkeit* は無規

定の規定、即ち並列的規定であることは吾々の既に知る所である。故に問題は如何にして直觀の相互貫通性から並列的規定が導き出されるかといふことである。そこで直觀は全體でなければならぬことは吾々の既に知る所であるが全體といふ以上はもはや直觀は對立を脱するわけには行かない。なんとすればそれ自身部分の *Peripherie* であるからである。従つて中心的部分に即して觀ると、直觀は、もはや純粹内面性、純粹中心性にとゞまらず、内面的と外面的、中心と周圍、直接と間接の規定を自身の内に許さざるを得ないのである。従つて相互貫通性の内に相互排除性即ち並列的規定が立せられることになる。こゝに吾々は相互貫通性の内にといふ、何となれば相互貫通性の存するがゆへに *das Ganze* が可能であり、従つて部分が出て來るからである。

故に吾々が部分に即し得るといふのも直觀の相互貫通性があるからであるから、之を無視して並列的規定を考へるとが出来ない。所でこゝに然りとすれば、相互貫通性は並列的規定なくしてはあり得ないではないかといふ疑が起り得るが、勿論吾々は之を肯定するものである。何となれば之を否定しては並列的規定の必然性がなくなるからである。併し乍ら部分的規定を以て直ちに全體をとらへることは出

來ない。此の點から並列的規定のみに即して直觀即ち認識の全體を説かんとするは、恰も Euclidian geometry を以つて一切の空間の性質を説かんとするやうなものである。問題としての問題 *stubborn chaos* なるものが残らざるを得ない。それが一切を抱括せざる限りは充實されない規定であるから、吾々は之を無規定の規定といふ。若し此の言葉が過激に聞へるならば之を形式的思惟といふても宜しい。之に對して吾々の所謂直觀を *konkretes Denken* 或は純粹經驗、又は *Erleben* と云ふても宜し。而して並列的規定を以ては多様なるものの統一が充實されないから之を多様性の統一といふ。之に對して吾々の説きたる論理的を多様なるものの統一と名付けて區別する。之は何も言葉に囚はれる必要なく、只概念を明瞭にせんが爲めであつて何も他に意味はない。

之迄考へて來たことに依ると、論理的の本質を以て單に並列的に考へて行くと、之に依て得た眞理は *formale Wahrheit* であつて、それを徹底せしめやうとすると *Bolzanos* の所謂 *Verhältnissbegriff* に終るから、吾々はより抱括的にしてより深い相互貫通性を以て論理的構成の基礎としたい。従つて吾々の所謂直觀をその基礎としたいものである。併し之は一つの *Ahnung* として終るかも知れない。